福井県立美術館 2014

美術館だより

MUSEUM NEWS Vol.142

contents

〈展覧会紹介〉「ゴッホの原点　オランダ風景画展　―ハーグ派の画家たち―」 [2～4]
〈イベント報告〉「生誕110年記念　棟方志功展」 [4]
「棟方と福井に深い縁」 [5]
〈イベント報告〉「生誕100年記念展　小野忠弘の軌跡」 [5]
〈イベント報告〉藝大アニメin福井 [5]
〈コラム〉横山大観の海外展での人気作 [6～7]
広報の星☆ブブ広報部隊の誕生 [7]
〈友の会〉平成26年度　春の見学会 [7]
美術館喫茶室ニホ　展覧会に合わせた新メニュー紹介 [8]
〈次回のテーマ展案内〉「風景の表現」 [8]
〈おしらせ〉休館日・次回の展覧会案内 [8]

表 紙：フィンセント・ファン・ゴッホ 《白い帽子をかぶった農婦の顔》(部分)　1884-85年　クレラー＝ミュラー美術館　Kröller-Müller Museum, Otterlo, The Netherlands

ゴッホの原点

オランダ風景画展
―ハーグ派の画家たち―

Reflections of Holland : The Hague School and Barbizon

2014年7月11日(金)～8月24日(日)

休　館　日◇7月28日(月)、8月11日(月)
開館時間◇午前9時～午後5時（入場は午後4時30分まで）
※7月11日(金)は午前10時～
主　　催◇福井県立美術館　　共　　催◇ＦＢＣ福井放送
後　　援◇オランダ王国大使館、オランダ政府観光局
協　　力◇ＫＬＭオランダ航空　　企画協力◇ブレーントラスト
料　　金◇一　　般　1000円（前売・団体800円）
高・大生　700円（団体560円）
小・中生　500円（団体400円）
※団体は20名以上。　※学生の方は学生証の提示が必要です。
※障害者手帳等をお持ちの方とその介護者1名は半額。

■関連イベント

◎記念講演会　「知られざる ゴッホとハーグ派」
8月9日(土)　午前10時30分～　当館講堂にて　※聴講無料
講師：古谷可由（ふるたに・よしゆき）氏
公益財団法人ひろしま美術館学芸部長、本展監修者

◎学芸員によるギャラリートーク
7月27日(日)、8月3日(日)　各午前10時～
当館展示室にて　※本展観覧券が必要です。

◎見どころ解説会
鑑賞のツボを学芸員が20分程度で分かりやすく解説します。
会期中　［平　　日］午前10時～
［土日祝日］午前10時～、午後3時～
当館講堂にて
※ただし7月27日(日)、8月3日(日)、9日(土)の午前10時の回および、7月11日(金)は開催しません。

■同時開催

テーマ展「風景の表現」　※本展観覧券にてご覧いただけます。

バルビゾンの森　オランダの光
―ゴッホとともに福井へ―

19世紀後半のオランダで、ポスト印象主義の画家ゴッホが「大物（マストドン）」とよんだ画家たちがいました。彼らは活動の拠点であった都市の名にちなんで「ハーグ派」とよばれていました。

彼ら「ハーグ派」は、屋外での直接の自然観察をもとに、原野や森、小川や池といったあるがままの自然、農村風景や農民の慎ましい生活を清新な表現でとらえました。その作品からは自然への温かな眼差しが感じられます。

彼らはオランダ美術の伝統に加え、フランスのバルビゾン派の作品も熱心に学びました。バルビゾン派はハーグ派に先行して戸外でスケッチし、田園や農村の風景を描いていました。ハーグ派の画家たちは、バルビゾン派を手本としながらオランダの風景を鋭敏な感覚で描き、後に続く画家たちに影響を与えました。

ゴッホとモンドリアンは、フランスを中心に展開する西洋のモダニズムのなかでも特異な位置を占めていますが、画業の初期にハーグ派から大きな影響を受けていました。彼らの作品を通じて、西洋モダニズム芸術の源泉のひとつをこのオランダ・ハーグ派に見出すことができます。

本展は、ハーグ派を日本で初めて本格的に紹介する展覧会です。オランダのハーグ市立美術館、クレラー＝ミュラー美術館の他、国内に所蔵されるバルビゾン派やゴッホの作品も含めた約70点を展観いたします。

ヨハン・バルトルト・ヨンキント（1819-1891）
《デルフトの眺め》1844年　油彩・カンヴァス　ハーグ市立美術館
Collection Gemeentemuseum Den Haag, The Hague, The Netherlands

［主な展示作品］

第1章―バルビゾン派

19世紀、コローやミレーなど、フランスのバルビゾン派の画家たちは、戸外でのスケッチをもとに自然を描きました。彼らは、17世紀のオランダの風景画を手本にしていました。バルビゾン派の作品から多くを学んだハーグ派の画家たちは、バルビゾン派を通して自国オランダの絵画を再発見したともいえます。オランダ人のヨンキントは、バルビゾン派との関係も深く、双方の架け橋のような存在でした。

第2章—ハーグ派

1. 風景画

ハーグ派の画家たちが、最も多く描いたテーマのひとつが風景です。ハーグ派はバルビゾン派にならって自然を観察し、風車、運河、干拓地など、オランダ特有の景観を描きました。広い空と地平線の描写もその特徴で、17世紀のオランダ黄金時代の絵画と共通しています。

上：ヴィレム・ルーロフス（1822-1897）
《虹》1875年　油彩・カンヴァス　ハーグ市立美術館
Collection Gemeentemuseum Den Haag, The Hague, The Netherlands

左：ヴィレム・ルーロフス（1822-1897）
《アプカウデ近く、風車のある干拓地の風景》1870年頃
油彩・カンヴァス　ハーグ市立美術館
Collection Gemeentemuseum Den Haag, The Hague, The Netherlands

右：ヤン・ヘンドリック・ヴァイセンブルフ（1824-1903）
《トレックフリート》1870年
油彩・カンヴァス　ハーグ市立美術館
Collection Gemeentemuseum Den Haag, The Hague, The Netherlands

2. 大地で働く農民

自然の中でたくましく生きる農民を描いた、バルビゾン派の画家ミレーの影響から、ハーグ派はオランダの風景のほかに、働く農民や漁師の姿をテーマにしました。

ミレーの農民画は大切な手本とされ、画家マタイス・マリスは《種をまく人》を基に版画を制作しています。

ヴィレム・マリス（1844-1910）
《水飲み場の仔牛たち》1863年
油彩・カンヴァス　ハーグ市立美術館
Collection Gemeentemuseum Den Haag, The Hague, The Netherlands

3. 家畜のいる風景

牛や馬など、農民の暮らしに欠くことのできない家畜は、ハーグ派の画家たちの重要なモティーフとなりました。それは目の前の風景であると同時に、17世紀のオランダ絵画の伝統でもありました。

ヴィレム・マリス（1844-1910）
《ロバの番をする少年》1865年
油彩／カンヴァス　ハーグ市立美術館
Collection Gemeentemuseum Den Haag, The Hague, The Netherlands

4. 室内と生活

何気ない室内の暮らしの情景も、ハーグ派の大切なテーマです。17世紀のオランダの画家フェルメールや、バルビゾン派のミレーの影響を受け、貧しい階層の女性たちのつましい日常生活が描かれています。

左：ヨーゼフ・イスラエルス（1824-1911）
《日曜の朝》1880年　油彩・板　ハーグ市立美術館
Collection Gemeentemuseum Den Haag, The Hague, The Netherlands

右：ヨーゼフ・イスラエルス（1824-1911）
《縫い物をする若い女》1880年頃
油彩・カンヴァス　ハーグ市立美術館
Collection Gemeentemuseum Den Haag, The Hague, The Netherlands

5．海景画

ハーグ派の画家たちは、海辺の景観や漁師の生活を数多く描きました。主に森を描いたバルビゾン派は近くに海をもちませんでした。広い空と雲、どこまでも続く水平線を描く海景画は、オランダ・ハーグ派独自の表現といえます。

左：ヤコブ・マリス（1837-1899）《漁船》1878年　油彩・カンヴァス　ハーグ市立美術館
Collection Gemeentemuseum Den Haag, The Hague, The Netherlands

右：アンドレアス・スヘルフハウト（1787-1870）
《スヘフェニンゲンの浜辺と船》1840年　油彩・板　ハーグ市立美術館
Collection Gemeentemuseum Den Haag, The Hague, The Netherlands

第3章―フィンセント・ファン・ゴッホとピート・モンドリアン

オランダ人のゴッホとモンドリアンは、画業の初期にハーグ派とつながりを持っています。ゴッホは16歳から20歳までハーグの画商で働き、その後ハーグ派の画家マウフェから油絵の描き方を学びました。抽象画家となるモンドリアンも、叔父の影響でハーグ派に接し作品を模写しています。

フィンセント・ファン・ゴッホ（1853-1890）《じゃがいもを掘る2人の農婦》1885年　油彩・カンヴァス　クレラー＝ミュラー美術館
Kröller-Müller Museum, Otterlo, The Netherlands

《イベント報告》

［ふるさと知事ネットワークによる美術館交流事業］

生誕一一〇年記念

棟方志功展

―青森県立美術館・棟方志功記念館コレクションによる―

平成26年2月21日(金)～3月23日(日)

主催　福井県立美術館

協力　青森県立美術館、棟方志功記念館

福井県立美術館では2月21日(金)から3月23日(日)まで、青森県立美術館、棟方志功記念館の協力を得て「生誕110年記念　棟方志功展」を開催しました。

本展では、「二菩薩釈迦十大弟子」「湧然する女者達々」「宇宙頌」「華狩頌」など棟方板画の代表作を中心に、初期の油彩画「雪国風景図」や大作「東北経鬼門譜」、独特の表現による美人画「門世の柵」、最大級の倭画「鷲栖図」など、青森県立美術館と棟方志功記念館が所蔵する貴重な作品の数々を展示し、国際的な板画家棟方志功の創作の軌跡と棟方芸術の魅力をひろく紹介しました。

「担当学芸員によるギャラリートーク」、「見どころ解説会」、「学校鑑賞会」、「キッズミュージアム」、「美術館学芸員トークサロン」など多彩なイベントやイヤホンガイドの導入などが行われ、当初の目標をはるかに上回る9,093人余りの方々に展覧会を楽しんでいただくことができました。

この場を借りて、お礼申し上げます。

＊

◎担当学芸員によるギャラリートーク

［日時］3月22日(土)、3月9日(日)　各午後2時～

［講師］西村直樹（学芸員）

＊

◎見どころ解説会

［日時］2月22日(土)、2月23日(日)、※3月1日(土)、3月22日(土)、3月23日(日)　各午後2時～　※は午後2時30分～

［講師］西村直樹（学芸員）

＊

◎キッズミュージアム「厚紙版画に挑戦だ！」

［日時］3月9日(日)、3月15日(土)　各午前10時～

［講師］内藤秀信（ペーパークラフトモデラー）、西村直樹（学芸員）

＊

◎美術館学芸員トークサロン「棟方志功とふくい」

［日時］3月9日(日)　午後4時30分～

［講師］西村直樹（学芸員）

自立と分散で日本を変えるふるさと知事ネットワーク　地勢の異なる地方の13県（青森、山形、石川、福井、山梨、長野、三重、奈良、鳥取、島根、高知、熊本、宮崎）が、新しいふるさとの創造に向けて、「ローカル・アンド・ローカル」の発想の下、人や地域の新しいネットワークをつくり、地方自治の新しいモデルをつくるための活動を行っています。

展示風景

担当学芸員によるギャラリートーク

見どころ解説会

キッズミュージアム

美術館学芸員トークサロン

《イベント報告》

東京藝術大学と福井県立美術館との連携事業

入場無料

藝大アニメ in 福井

東京藝術大学大学院映像研究科アニメーション専攻修了制作上映会

2014年4月26日(土)～5月6日(水) ※5月4日は上映休止

手塚雄二福井県立美術館特別館長が教鞭をとる東京藝術大学と福井県とのコラボレーション事業として、東京藝術大学大学院映像研究科アニメーション専攻の修了生の第１期から第５期生まで64本による、優れたアニメーション作品を上映しました。

次代を担う若手クリエーターによる多様な表現で、多くの方に楽しんでいただけました。

これからも日本の美術教育の中心であり、岡倉天心ともゆかりの深い東京藝術大学とさまざまな形で連携を探っていきたいと思います。

「棟方と福井に深い縁」

学芸員　西村直樹

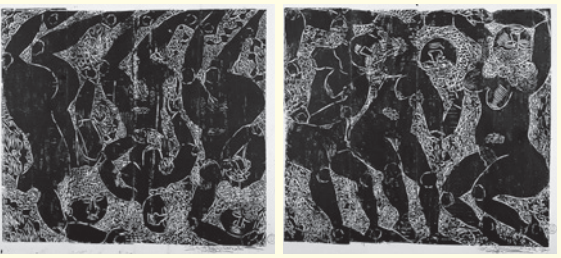
棟方志功の創作活動の原点となった青森時代と、その後の福井との関係について触れたい。

棟方志功は青森地方裁判所の給仕として働いていた18歳のころ、ゴッホの複製画を見て画家を志す。棟方は当時のことを「弘前出身で小野忠明氏（現在アブストラクトで活躍している小野忠弘氏の兄さん）がいて、＝中略＝その人からゴッホの原色版をもらった。その原色版はひまわりの絵だった。そこでわたしはなんでもゴッホになるとみんなにいったもんだ」と『花深処無行跡』に記している。アカデミックな美術教育を受けていない棟方は、小野忠明から油絵道具一式を譲り受け手ほどきを受けた。「雪国風景図」（1924年）には、当時よくモチーフにした青森聖アンデレ教会が描かれている。

教会の隣にあった花屋の店先で棟方は、小規模な個展を開いている。当時いち早くその才能を見いだした一人に太宰治がいた。太宰は『青森』というエッセーで「私が中学二年生のころ、寺町の小さい花屋に洋画が五、六枚かざられていて、私は子供心にも、その画に少し感心しました。そのうちの一枚を、二円で買ひました。＝中略＝いまでは百円でも安すぎるでせう。棟方志功氏の、初期の傑作でした」と書いている。

一方、棟方は小野忠弘に「おまえは俺より絵がうまいな」と言って、美術家になるきっかけの一つを与えている。その後も旧三国町（福井県）に移住していた小野忠弘を訪ねたり招いたりして親交を結んでいる。「アブストラクトでは小野、版画では俺」と周囲に語り、韓国のある美術家への手紙で「日本の新しい彫刻をしている小野忠弘さん」と書くなど才能を高く評価していた。福井大震災直後には、疎開していた富山県福光町で「福井震災救援棟方志功小品板画展」を開き義援金を送るなど、福井との縁は深い。

棟方は長い時は１カ月も三国に滞在し、小野忠弘と芸術論をたたかわせながら制作したという。全く方向性の異なる作風を持つ二人はどこに魅かれあったのであろうか。「棟方に、ビエンナーレに出品する作品について意見を求められたことがあり、作品の（片方の）天地を逆にしたらよくなるんじゃないかと進言した。そのかたちにして出品したら見事受賞した」と生前小野忠弘が筆者に語ったことがある。該当する作品はサンパウロ・ビエンナーレで版画部門最高賞を受賞した「湧然する女者達々」（53年）と思われる。棟方のあたらしい感覚や感動を自身の作品に取り込もうとする貪欲なエネルギーは、ゴッホのひまわりを見た若き日から一貫して変わることがなかったのではないか。



棟方志功《湧然する女者達々》（1953年）棟方志功記念館蔵

※本文は、寄稿文（福井新聞、３月14日掲載）を抜粋・改稿した。

《イベント報告》生誕100年記念展

小野忠弘の軌跡

平成26年２月21日(金)～３月23日(日)

主催　福井県立美術館

協力　青森県立美術館

福井県立美術館では「生誕110年記念　棟方志功展」と同期間、「生誕100年記念展　小野忠弘の軌跡」を開催しました。

本展では、《無題》や《影の部分》など青森県立美術館が所蔵する初期の貴重な油彩画から、《BLUE》《Silver》など晩年の傑作群までを一堂に展示し、国際的に活躍した小野の創作活動の軌跡を紹介するとともに小野忠弘の表現の深層に迫りました。

また小野忠弘の実兄で若き日の棟方志功に絵を指導した小野忠明（画家、考古学者）の版画作品も併せて紹介しました。

「担当学芸員によるギャラリートーク」などのイベントが行われ、9,110人余りの方々にご来場いただくことができました。

＊

◎担当学芸員によるギャラリートーク

［日時］３月15日(土)、３月21日（金・祝）各午後２時～

［講師］西村直樹（学芸員）

担当学芸員による
ギャラリートーク

展示風景

column

コラム 横山大観の海外展での人気作

学芸員　佐々木美帆

日本からロシアへの宣戦布告が行われた明治37年2月10日、横山大観は師・岡倉天心と菱田春草、六角紫水ともに日本郵船の汽船「伊豫丸」で横浜を発ち、米国シアトルへ向かった。岡倉と六角はボストン美術館で東洋美術品の整理の仕事をするために、横山、菱田は、絵画上の新しい試みが不評であった自分たちの絵が、戦争による不景気でさらに売れなくなるという悪循環から抜け出すための渡米であった。

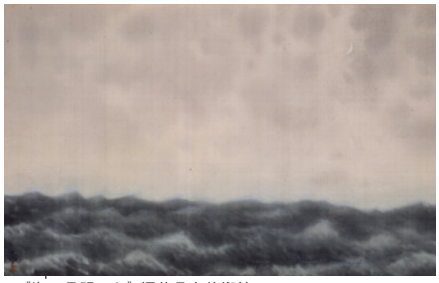
米国ニューヨークについた一行は、岡倉の友人で世界的なオペラ歌手であったエマ・サースビー、その妹のアイナ・サースビー姉妹の歓迎を受け、渡米中のあらゆる便宜がこの姉妹たちによって図られることになった。

横山や菱田は絵を売って滞在費や欧州への渡航費を稼ぎ、家族への仕送りや傾きかけた日本美術院へ送金をするため、米国滞在の1年半の間に5回程度の展覧会を開いた。「彼ら芸術家の絵の多くはその当時アイナ・サースビーによって手配された即売展覧会でニューヨークの家々に引き取られていった」（“The Life Of Emma Thursby, 1845-1931.”）ように姉妹の人脈で売れた絵も多いだろうが、サースビー姉妹自身が買い取った、もしくはお礼にプレゼントされたとみられる横山や菱田の作品も多い。当館所蔵の《杜鵑》や《海ー月明かり》もそうしたサースビー姉妹の旧蔵作品である。《月あかり》（飯田市美術博物館蔵）については、展覧会を通じて米国人の所蔵になった、もしくは画廊が一旦預かっていたものだったなど、様々な可能性が残されている。

“海”は横山にとって鉄壁のシリーズであったようで海外展で最も多く出品し、その次が“杜鵑”であった。サースビー姉妹は横山の海外作のうち最も人気の高いこの2点、“海”のシリーズと“杜鵑”を抑えていた。

（表1）、（表2）に“海”や、“杜鵑”を描いたと思われるものの出品数の根拠について、出品カタログ、当時の新聞雑誌の論評からまとめて示した。

それを見れば“海”のシリーズは題名から月下の海を描いたもの、日中の海を描いたと思われるものに大きく二分され、そこからさらに四季を描いたものに細分化されることが分かる。展覧会ごとに趣向を変え、



1.《海ー月明かり》福井県立美術館

2.《月あかり》飯田市美術博物館

5.《月あかり》個人蔵

◀光の具合から光源は太陽であるようにも見えるが、絹の裏には「No.12 Moonlight on the sea by Yokoyama Taikan」と書かれていたという。『生誕百三十年記念展　天心とアジアの理想』（平成4年、福井新聞社）より転載

（表1）《海ー月明かり》関連作の出品

関連作出品展	会　期	作品名（英名）	補足情報
センチュリー・アソシエーション展	明治37（1904）4.9～5.1	海ー月明かり The Sea-Moonlight	出品カタログに作品名記載、「Sold 2150　Miss Barnes」の手書き文字あり。「『海』は、自然を写実的に描いている」（The Independent.1904.5.12）
ケンブリッジ展	明治37（1904）11.17～11.27	春海の月光　Moonlight on the Spring Sea 夏海の月光　Moonlight on the Summer Sea 秋海の月光　Moonlight on the Autumn Sea 冬海の月光　Moonlight on the Winter Sea	出品カタログに作品名記載。類似の作品にボストン美術館所蔵作"Waves in Moonlight"《月下の海》（フランシス・ガードナー・カーティス夫人旧蔵）、当館所蔵作《海ー月明かり》（サースビー姉妹旧蔵）がある。カーティス夫人の姑とエマ・サースビーの両者はケンブリッジ展で呈茶係をしているので、同展の出品作を購入したのかもしれない。
ナショナル・アーツ・クラブ	明治38（1905）1.4～1.21	春の海　Spring Sea 夏の海　Summer Sea	出品カタログに作品名記載あり。
フィッシャー・ギャラリー	明治38（1905）3.27～	―	「白色で覆われた緑色の海、灰色の空の半月」。大観か春草どちらか不明、題不明（20番）。（The Washington Post. 1905.3.26）
第1回展ロンドン展グレーブス・ギャラリー	明治38（1905）7.10～8.5(6?)	冬の海　Winter Sea	雑誌に作品名記載あり。（The Speaker. 1905.7.22）
パリのオータム・サロン	明治38(1905)11.25～	―	「日本の水彩画、特に風景画と海景画がすばらしい。二人の水彩画家は、銀色と真珠の灰色の色彩のハーモニーの中で、夢の、そして月光の中の日本を表現」（New-York tribune.1905.11.26） 「霞や霧、月光あるいは黄昏に満ちた画題」（TheCraftsman.1906.5.1）
第2回ロンドン展(1907.1)前に日本橋倶楽部で展示された作品	明治39(1906)4.2～4.4	春の海 夏の海 秋の海 冬の海	『美術研究資料　第九輯　菱田春草』1940（昭和15）年、美術研究所　50頁

（表2）《杜鵑》関連作の出品

センチュリー・アソシエーション展	明治37(1904)4.9～5.1	杜鵑　A Cuckoo	「Sold 2,100　× W.a White」の手書き文字あり。「急流の川と松の木々が霧を通してぼんやりと見え、中空高く横切っている鳥」（N.Y.times.1904.4.29）
ケンブリッジ展	明治37(1904)11.17～11.27	杜鵑　The Cuckoo	出品カタログに作品名記載あり。サースビー姉妹旧蔵の当館蔵《杜鵑》はエマ・サースビーが呈茶係を務めたこの展覧会で購入したものか？
ナショナル・アーツ・クラブ	明治38(1905)1.4～1.21	杜鵑　Cuckoo	出品カタログに作品名記載あり。
パリのオータム・サロン	明治38(1905)11.25～	―	新聞評に、題、作者不明だが、同作を思わせるモチーフ「モミの木や…」という記載がある。（New-York tribune.1905.11.26）
第2回ロンドン展(1907.1)前に日本橋倶楽部で展示された作品	明治39(1906)4.2～4.4	杜鵑	『美術研究資料　第九輯　菱田春草』1940（昭和15）年、美術研究所　50頁

求めに応じて類似作も制作したということだろう。

また、このシリーズは14点程度あると考えられるが、現在存在が確認されるのは以下の5点である。

《杜鵑》福井県立美術館

1.《海—月明かり》
福井県立美術館
40.7×60.5cm エマ・サースビー旧蔵

2.《月あかり》
飯田市美術博物館
46.3×60.5cm

3.《Waves in Moonlight》
ボストン美術館48.8×64.0cm　フランシス・ガードナー・カーティス夫人旧蔵
※ボストン美術館HPに画像あり

4.《The Sea》
ボストン美術館　46.8×61.1cm　エドワード・ジャクソン・ホームズ夫人旧蔵
※ボストン美術館HPに画像あり

5.《月あかり》
個人蔵　50.1×73.2cm　渡英中の作品

1～2は水平線を極端に下げ、省略した筆致で描いているのに対し、5はその反対で海が画面の7割を占め、月とも太陽ともつかない光源がさざ波を照らす様子を細かく描き表わしている。なかでも5の米国から英国に渡ってからの絵は、波の表現がより写実に近づき、1年半の外遊の後半で横山が西洋画法をすっかりものにした様子がうかがえる。西洋画の影響は絵の大きさにも見受けられ、いずれの“海”のシリーズも12～20号の海景型、もしくは風景型のキャンバスサイズに倣っている。

“海”に続いて出品数が多い“杜鵑”は、5点程度描いたと考えられる。前者に比べて数が落ちるのはバリエーションの作りづらさに原因がある。杜鵑はモミの木の梢で夜半から早朝にかけて盛んに鳴く夏を知らせる野鳥で、当館の《杜鵑》もその前提を頭に置いて筆が執られている。センチュリー展出品作のように下方に川を入れるくらいの変化はつけられようが、「初夏・早朝のモミの木々と杜鵑」の束縛から、重複した画面になるのを嫌い、結果的に各展1点ずつしか出せなかったのだろう。

当館の旧サースビー・コレクションである《杜鵑》や《海—月明かり》の類似作の多さから、これらは横山の外遊時代の人気作品であることは間違いないが、岡倉一行のパトロンであったサースビー姉妹の元にこの作品があったということは、姉妹達の好意に感謝して横山が誰よりも先に自信作を融通したということではないだろうか。

広報の星☆ブブ広報部隊の結成

彼らは学芸員室に生息している

そのため、いち早く情報を手にして軽やかに発信できるのが強みである

しかし学芸員が仕事に忙殺されていると

我が館のフェイスブックはブブ広報部隊の任である

最初は学芸員に心の余裕があるときだけ登場する限定キャラのはずだった

しかし知名度が上がるにつれ待遇が良くなり

ついに専任スタイリストがつくまでになった

福井県立美術館 友の会

〈平成26年度 春の見学会〉

日時◎平成26年6月10日㈫～12日㈭

参加人数◎26名／行き先◎新潟県立万代島美術館「国立国際美術館コレクション　美術の冒険」、五浦観光ホテル別館・横山大観旧別荘、茨城県天心記念五浦美術館　岡倉天心記念室、五浦海岸、六角堂、映画「天心」の日本美術院ロケセット見学、茨城県近代美術館「生誕100周年記念　中原淳一展」、茨城県陶芸美術館「麗しのマイセン」、那須高原　藤城清治美術館、那須ステンドグラス美術館

五浦海岸の映画「天心」日本美術院研究所セットの前で

那須ステンドグラス美術館にて

福井にもゆかりのある岡倉天心であるが、ぜひ他のゆかりの地も廻ってみたいものだ…。そうお悩みの会員様たちのリクエストに答え、今回の旅のメインは岡倉天心がその晩年を過ごした茨城県北茨城市の五浦となりました。展覧会は現代美術から日本画、工芸、デザイン、西洋美術までバラエティーに富み、最後は那須ステンドグラス美術館のパイプオルガンとアンティーク・オルゴールの音色に心洗われて帰路につきました。

ブブ広報部隊はフェイスブックでの旅行レポート発信の重責を果たし終え、旅の汚れを綺麗に落としました。

美術館 喫茶室 ニホ

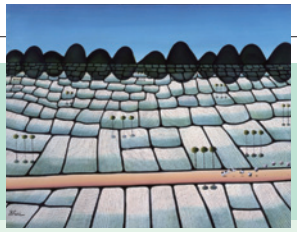
オランダ風景画展
スペシャルメニュー
「ハーグスクール」のご紹介

展覧会のハーグ派（The Hague School）と夏に向けての涼しさ（Cool）を掛け合わせた名前の「ハーグスクール」はミントとライムのソーダ割にグレープフルーツのアイスを浮かべ、さっぱりとした夏向きメニューです。7～8月限定で600円です。

オープンカフェ
やってます

Contact 美術館喫茶室 ニホ
open: 9時～19時 closed: 月曜日
tel: 0776-43-0310 ＊無料Wi-Fi＊
address:
〒910-0017 福井市文京3丁目16-1
福井県立美術館 正面左手
※美術館が休館でも、月曜日以外は営業しております。

次回のテーマ展案内



久里洋二《田園風景》1977（昭和52）年
キャンバス、水彩・ガッシュ

7/11㈮～8/24㈰
「風景の表現」
同時開催◎オランダ風景画点

次回のテーマ展「風景の表現」では、様々な作家が日本画、洋画、水彩、素描、写真など多様な手法によって捉え表現してきた「風景」の数々を、当館の所蔵品の中からご紹介します。

休館日　7月28日㈪、8月11日㈪
開館時間　午前9時～午後5時（入場は午後4時30分まで）
観覧料　一般・大学生100円（高校生以下、70歳以上、障害者手帳等をお持ちの方およびその介護者1名は無料）

水谷内健次《金歯風》1976（昭和51）年
印画紙、ゼラチンシルバープリント

寺田政明《夜C》1940（昭和15）年
キャンバス、油彩

お知ら せ

◎2014年7月～9月の休館日について

展示替え、館内メンテナンス等のため、次の日は休館とさせていただきますのでご了承ください。
7月1日㈫～10日㈭、28日㈪、8月11日㈪、25日㈪～31日㈰、9月1日㈪～3日㈬、9日㈫、15日㈪～25日㈭

福井県立美術館　次回の企画展案内

真宗の美―親鸞と福井、ゆかりの名宝―

浄土真宗は鎌倉時代に活躍した仏教者親鸞聖人（1173～1262）により開かれました。その教えは全国各地に広まり、その過程で特色ある造形作品が数多く生み出されました。福井県は別名「真宗王国」とも呼ばれ、多くの寺院やゆかりの品々が集まる真宗とは関係の深い地域です。本展覧会は、県内を中心とする真宗寺院に秘蔵されてきた西本願寺の宝物物に、名号御影などを展示、浄土真宗の信仰と歴史、そして育まれてきた美を紹介します。

「南無仏太子像」
永平寺町・本覚寺蔵

＊　＊　＊　＊

会　　期◎2014年9月26日㈮－10月26日㈰
開館時間◎午前9時～午後5時（入館は閉館の30分前まで）
観覧料◎一般 1200円（前売り・団体1000円）／
大・高生 800円（団体600円）／中・小生 500円（団体300円）
※前売りは一般のみ。団体は20名以上。
障害者手帳等提示者および介護者1名は半額。未就学児は無料。
関連イベント◎講演会「日本絵画の美」
講師：手塚雄二（東京藝術大学教授／福井県立美術館特別館長）
9月27日㈯　午後1時30分～2時30分
◎講演会「真宗の美術―見方・考え方―」
講師：津田徹英（東京文化財研究所文化形成研究室長）
10月4日㈯　午後1時30分～3時

再興第99回院展福井展

日本美術院は本県にもゆかりのある岡倉天心が1898年（明治31年）に設立した美術研究団体で、天心の没後、その遺志を引き継いだ横山大観や下村観山らによって1914年（大正3年）に再興されました。日本を代表する日本画の公募団体として現在に至り、本年はその再興から100年目となります。3年ぶりの開催となる福井展では、手塚雄二福井県立美術館特別館長をはじめとする日本美術院同人の新作、招待、無鑑査、北陸在住・出身作家の入選作を紹介します。

再興第98回院展「遠望立山」
手塚雄二（福井県立美術館特別館長）

＊　＊　＊　＊

会　　期◎2014年11月14日㈮-11月24日㈪
開館時間◎午前9時～午後5時（入館は閉館の30分前まで）
観覧料◎一般 900円（前売り・団体700円）／
大・高生 500円／中・小生 無料
関連イベント◎ふくい天心美術塾講演会「日本画の魅力」
講師：手塚雄二（東京藝術大学教授／福井県立美術館特別館長）
11月14日㈮　午後1時半～2時半
◎［ギャラリー・トーク］　講師：手塚雄二
11月14日㈮　午前10時～10時半　※本展観覧券が必要です。

7/18㈮正午に福井県立若狭歴史博物館がリニューアルオープンします！
重要文化財級の美しい仏像、解体新書やターヘル・アナトミアなどの貴重な資料を展示します。
福井県小浜市遠敷2丁目104　TEL.0770-56-0525

美術館だより第142号
本誌は再生紙を使用しています。
編集／発行：福井県立美術館　〒910-0017 福井市文京3丁目16-1　tel.0776-25-0452　印刷：河和田屋印刷株式会社　発行日：平成26年6月27日　14.06.20220